

経典結集 — 仏教聖典の成立と翻訳 —

お経とは

お経とは、釈尊の教えを綴^{つづ}った書物のことです。「経」は、サンスクリット（梵語^{ぼんご}）の原語で「スートラ」と言い、繋ぎ合わせる糸という意味で、「簡単な規則」を指します。

仏教がインドから伝わってきたとき、中国では仏の説法を記した書物であることから、「スートラ」の訳語として「経」という漢字をあてました。「経」という漢字は「たて糸」のことで、「すじみち」とか「ことわり」の意味です。

お経は、釈尊自らが書き残したものではなく、仏の滅後、弟子たちが聴聞した教えを集め、確認し合って出来上がりました。

三蔵

仏教の聖典としては「経」の他に「律^{りつ}」があります。律は釈尊の教えを奉じて生活する人たちが、守るべき規則や戒^{かい}を記したものです。また後には「経」や「律」の内容を検討し、哲学的な解説や思想を説く書物も著されました。これを「論^{ろん}」と言います。この「経」「律」「論」を合わせて三蔵^{さんぞう}と言います。

本来、「経」は三蔵のうちの釈尊の説いた教理の部分を指しますが、中国や日本では、三蔵を一括して「経」と言うようになり、仏教全般を指して、「大蔵経」「一切経」などと呼んでいます。

仏典の結集

釈尊の滅後、弟子たちが集まり、教えを正しく残すために、大きな会議が開かれました。これを仏典の結集^{けつじゅう}と言います。その主なものは、次の四つとされています。

第一回の会議は、釈尊入滅の年に、阿闍世王の外護のもとに摩竭陀国・王舎城^{まがだこく おうしゃじょう}の南、畢波羅山の七葉窟^{ひつばらざん しちようくつ}において、五百人の僧侶が集まって、大迦葉^{だいかしやう}が司会者となり、優波離^{うぱり}が「律」を、阿難^{あなん}が「法」を暗誦^{あんじゆ}し、順序を整えて整理しました。

第二回の会議は、釈尊入滅後百年の頃、毘舍離城^{びしゃりじやう}において耶舎陀^{やしやだ}を中心に七百人によって、「律」の合誦^{ごうじゆ}を行い、「律」を中心として結集を行い、教団の統制を図りました。この時、教義と実践の微細な点について異論があり、教団が分裂しました。それは、保守伝統主義的な「上座部^{じやうざぶ}」と、革新寛容的な「大衆部^{だいしゆぶ}」の二つであり、これを「根本分裂」と言います。なお、この分裂以前を「原始仏教（初期仏教）」、以後を「部派仏教」と呼んでいます。

第三回の会議は、釈尊滅後二百年頃、阿育王の外護のもとに華氏城^{あいくおう} 鷄園寺^{けしじやうけいおんじ}において、目犍連帝須^{もっけんれんていす}を中心に一千人が集まって行われました。この結集では、仏教教義の混濁^{こんたく}を正すことを目的とし、ここに初めて経律論の三蔵が完成したとされています。

第四回の会議は、釈尊滅後四百年頃、迦膩色迦王^{かにしかおう}の外護のもと、迦湿弥羅国^{かじゆみらく}（カシミ

ール)において、脇尊者きょうそんじや、そして世友せうを含めた五百人が集まり、阿毘達磨大毘婆沙論あびだつまだいびぼしゃろんの編纂へんさんをしたと言われています。

以上のように、経典結集が進められましたが、結集の年代については、釈尊の入滅年代や時代の考証から、いくつかの学説があります。

伝承翻訳の功勞

『守護国家論』に、

「如来の入滅は既に二千二百余の星霜せいそうを送れり。文殊もんじゆ・迦葉かしょう・阿難あなん、経を結集けつじゆうせし已後、四依の菩薩重ねて世に出でて論を造り経の意を申ぶ」(御書 一二七)

と仰せのように、先徳のなみなみならぬ苦勞によって、今日多くの経典が伝承され、仏の慈悲を身近に拝することができます。

『撰時抄』に、

「総じて月支より漢土に経論をわたす人、旧訳新訳に一百八十六人なり。羅什三蔵一人を除いてはいづれの人々も誤らざるはなし」(同 八四七)

と仰せの中に、「旧訳新訳に一百八十六人」とありますが、これはインドのサンスクリット語を中国の漢字に翻訳した新・旧の経典の訳者が百八十六人いたということです。

この漢訳された経典のうち、唐の玄奘以前に訳されたものを旧訳と言ひ、玄奘以後に訳されたものを新訳と言ひます。旧訳が訳経の義意を通じさせることに重きが置かれているのに対し、新訳は直訳に重点が置かれています。

このように、お経の形を整え、仏の本意を正しく伝えるために、多くの人々の苦勞がありました。中でも法華経などの大乘経典を翻訳した羅什三蔵の功績はたいへん大きいと言えます。

その訳経の数は、『開元釈教録』によると、七十四部三百八十四卷(「出三蔵記集」によると、三十五部二百九十四卷)にのぼり、代表的な翻訳には大品般若経だいぼんはんにやきよう・維摩経ゆいまさきよう・大智度論・中論・百論・十二門論などがあります。特に法華経の翻訳については最も心血を注ぎ、五百人の訳経僧を指揮して訳出したと言われています。

羅什三蔵は、仏法の所伝の正しさを証明するため、次のように語ったと言われています。

「自分は闇愚あんぐであつて、しかも不浄の身をもって訳経した。自分が死んだら必ず火葬せよ。もし仏法の所伝に誤りがないならば、身は焼けても必ず舌は焼けないであろう。もし舌が焼けたならば、我が訳経も捨てよ」と。

羅什三蔵の死後、遺言に従つて火葬したところ、舌のみが焼けずに火中の青蓮華しょうれんげの上に遺り、五色の光を放つたと伝えられています。

『兄弟抄』に、

「旧訳の経は五千四十八卷なり。新訳の経は七千三百九十九卷なり。(中略)然るに法華経と彼の経々とを引き合はせて之を見るに勝劣天地なり、高下雲泥なり」(同 九七七)

と仰せられていますが、多くのお経が伝承されている中で、仏の本意とする眞実の教えは法華経であることを、私たちは銘記しなければなりません。